
名もなき世界の物語

ゆう一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名もなき世界の物語

【Nコード】

N8932D

【作者名】

ゆうー

【あらすじ】

とある世界にはまだ、魔法とゆう力が人々の中に眠っていた。その世界のラスアとゆう都市のはずれにルルとゆう一人の少女がいた。

第1章 空中バイクを追って（前書き）

オリジナルの小説です！！

がんばって作りました！！

第1章 空中バイクを追って

第1章 空中バイクを追って

さかだった金色の髪がよく目立つ青年が

夜の闇の中荒野で一人、空中バイクの明かりをたよりに走らせていた

旅人なのか、その服はボロボロで汚れていた

口はマスクで覆っていたがその、水色の目はどこか悲しみをを見せていた

そして、彼は目線の先にある都市を獲物を見る様に見つめていた

ここは、ガルベリア王国の王都ラスア。この世界で小さくもないが大きくもない都市だが、高い建物が並びその上には空中艇や空中バイク、国々を結ぶ空中列車などがひしめく様に飛んでいた。ラスアの中心には、ガルベリア王国の宮殿などもあり、ラスアの中心の街は、いつも活気づいていた。

だが、この都市の北のはずれは、そんな街中の様子をうかがうように、ひっそりとしていた。そして、そこでは、牧場や農場などを営みながら暮らす者が多いが、16年前にここに越してきたある親子がいた。その親子は小さな小屋と、小さな畑と、小さな武術塾を営む。少し変わった親子がいた。

そして、その、武術塾はこの辺では、有名な武術塾だった。

『クラウルさん！今日もお稽古ありがとうございました！』

眼鏡をかけて、黒髪の寝癖で少しグシャリとした14歳ぐらいの少年が、煙草をふかしながら、武術塾の木でできた受付の台に足を乗せながら、座っているだらしない格好をした男に、尊敬の眼差しで挨拶をした。

『おう。ひよっこ。また、おいで』

クラウンは、青の薄い髪の頭をかきながら、静かに言った。

『ひよっこでは、ありません！！こう見えてもあと、半月たてば15です！！立派な騎士になってガルベリア王国をお守りするのです

「！！それに、僕の名前はひよっこではなく、アルとゆう立派な名前があるのです！」

「おおそれは、わるかったな、アル。」

反省している気がないように、クラウンはそっぽを向いて謝った。

「もう〜」

アルは、怒ったように口を膨らませた。

《刀を握れば、すごいお方なのに・・・》

そして、ポツリと小声で言った。

「それより、クラウンさん。ルルさんは、今日はいないんですか？
ルルさんにも、教えてもらいたかったのにな・・・」

アルは少し残念そうに言った。

「ああ、アイツなら、今、街の方に買出しに行ってるよ。」

「そうなんですか！！ルルさんは、しっかりしてとても偉いですね！！クラウンさんとは、大違いですね！！」

クラウンはしばらく間をおき、ゆっくりと頭の上の紋章らしきものを見つめてゆっくりと、煙草の煙を吐き出した。

「・・・そうだな・・・」

ルルは、アルと二つ上のクラウンの娘でクラウンの青の薄い髪の色とは、違い紅の色をした髪の色で毛先がクルリとしていて

この国で一番とされている剣術をほこっているクラウンの次に上手いと認められている。剣術といっても変わった剣で、クラウンはその剣の事を”かたな”と呼んでいる。

ルルは、今、ラスアの中心である市街地で買出しに行っていた。

市街地では、毎日たくさんの屋台が並んでおりラスアで一番の商売地でいつも、かつきずいていたが

今日は、人通りがまばらで、その変わりに鎧を着た騎士がたくさんいたのだった。

『おおールル！！今日は、買出しかい？？』

魚屋の親父が買い物がごを持ったルルに話しかけた。

『うん！そうなの！パパはいつも、ダラダラしてて、お稽古しかまともに体、動かさなくて、私しか買出しにこれないから』

ルルは明るく答えた

『ははは！！じゃーそんなルルに免じて、おじさんおまけしてあげるよ！！』

魚屋の親父はニツカ〜と笑ってかなり、大きめな魚をルルに渡した。

『ありがとう！！助かるよ！！おじさん！』

ルルが笑顔で答えた。

すると、隣の果物屋の親父がでてきた。

『へ！！何が今日は特別だ！ルルには毎日特別だろ』

『うるせいやい！！』

魚屋の親父は少し照れたように言った。

それを見ていたルルは、くすくすと笑った。

『そついやそうと・・・昨日の夜。サスライ人が門番の監視を退いてこの街に入ってきたそうだ・・・』

果物屋の親父は深刻そうに言った。

『だから、こんなにたくさん軍の騎士がいるのかしら』

ルルは周りを見た。

『ああゝそうかもなゝそのサスライ人かなりの使い手で剣術もかなりの腕で、魔力もそこそこあるとか・・・ルル。気をつけるよ！いくら剣術がこの国で2番手だとしても・・・お前は女だからな・・・』

果物屋の親父は真剣な眼差しでルルを見つめた

『わかった！！気をつけるね』

ルルはそう答えると魚屋と果物屋を後にした。

『さて、もうそろそろお家にもどらないとな』

ルルは、ラスアの都市のちょうど中心にある、橋を渡っていた。そして、ふと橋の下に

流れている川に目をやり、目の前に広がるガルベリア王国の宮殿に目をやった

ガルベリアの宮殿は、3賢者の魔法によって3つのドーム型の建物となっており一番小さいドームの

一番てっぺんには、魔法の力によって生まれた時から眠り続けている姫が眠っているとゆう噂があり

その奥のドームは王族以外誰入った者はいないとさえていたのだった。

『・・・王女様が眠っている宮殿か・・・』

風がよそよそと、ルルの髪を撫でた

『いったい、どうゆう人なんだろ・・・』

しばらく、ルルはその場で宮殿を見つめていた。

すると、急に風が強くルルに当たってきた。

ざわわわわ

『な、何???風つよ!!!』

ルルは、おもむろに風が強く吹いてくる後方を見た。すると、金色の髪をした顔を半分マスクで覆って

不思議な青年が空中バイクに乗ってルルの方へ飛んできた

ルルは青年の顔を見た。

その青年も橋にいる少女が気になったのか顔を少しルルの方へ傾け目でルルを見た。すると、時間がその瞬間だけ、止まってしまったような、不思議な感覚になった

ルルは青年の水色の目の奥がキラリと輝いたように見えた

ルルはぎゅっと自分がもっている買物かごを、握り締めた。

『目・・・綺麗』

ルルはそう、ポツリとつぶやいた

青年は目でルルを確認した後、目を細め、また、宮殿の方へ顔を向けものすごいいきおいで飛んでいったのだった。

すると、また時間が動きだしたかのように、風がルルに当たってきた

ざ~~~~~

『きゃー!!』

ルルは顔を隠した

『すごい風!!あの、空中バイク・・・きっと風の力を使った魔法でとんでいるだろうな。』

ルルは、青年が飛んでいった宮殿の方を見た

だが、もうそこには、青年の姿は見られなかった。

『あー!!こんな事してられない!!パパが待ってるから、早く帰ら

なきや〜
』

ルルは、街のはずれにある自分の家へ戻った。

『ただいま〜!!』

『おかえり。』

クラウンは、小さいテレビをつけながら、新聞を読んでいた。

『また、テレビ見ながら、新聞よんでる〜』

『俺は、起用だから何かと一緒にやらなきゃ気がすまないの。』

『起用とか・・・関係ないよ・・・』

ルルは呆れながら言った。

ボツツカアン

すると、街の方から、何かが爆発する音が聞こえた。

『な、何??.?』

ルルはびっくりして、座りこんでいた。クラウンは急いで窓の外を

見た。

『・・・・・・・・宮殿が燃えている。』

クラウンは静かに言った。

『え?????!!!』

ルルは自分の目で確かめようと急いでクラウンがいる窓の方へ向かった。

すると、宮殿が真つ赤の炎につつまれていて、宮殿の上には大きな軍用の中空艦が飛んでいた。

『空中艇が・・・・なんであんな所に・・・』

p i p p i p p i

クラウンのポケットの中から電子的な音がなっている。

クラウンはポケットの中からガルベリア王家の紋章が付いている二つ折の機械らしき物を出した。

クラウンがその機械を出すと二つ折の機械は自動で開いた。そして立体映像でガルベリアの紋章がクルクルと周りながら出てきた。

ぎゅん・・・・・・・・

すると、何か音が聞こえた。

ルルはのぞくように、その機械を見た。

【ざざざ・・・ク、クラウンざざざ・・・き、聞こえるか？】

『ああ、聞こえるよ。』

クラウンは冷静にその機械に向けて話した。

【宮殿の結界が破られた・・・ざざざ・・我々だけでは歯がたたん・・・ざざざ、至急応援をたのむ・・・ぞぞぞ】

『了解。』

【た、隊長！！ざざざ・・敵が・・・ぴ~~~~ゆ~~~~ん】

どつかああああああん

『きゃー！ー！』

ラスアの空に赤い光が広がった。

生々しい戦場の現場をルルは無線で聞いてしまい。身震いがした。

【ぞぞぞああああああ】

ブッソン。

無線の音が途絶えた。

『どつやら・・・出番がきたようだ。』

クラウンはそう言うと、受付にあるボタンを押した。
すると、受付が半分に割れ中から、黒い箱が出てきた

『何？？箱』

ルルは始めて見る箱だった。

クラウンは黙っていた。そして、箱の上にあるAとXのアルファベツト

と0～9までのボタンらしきものを、右手で高速で何かをうったずると

箱が開き、中から研ぎ澄まされた刀と拳銃と透明の水色の水晶が出てきた。

クラウンはそれらを、装備し、頭に王家の紋章が書いてあるターバンをまいた。

『もしかして、行くの？？』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

クラウンは、黙っていた。

『私も・・・・・・・・』

『駄目だ。』

クラウンはルルがすべて言う前に返事を返した。

そして、その目はいつものクラウンの目と違い鋭い目をしていた。ルルは、その目を見てぎゅうっと両手を握りしめた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『お前は、ここにいろ。』

そう言うと、クラウンは何かブツブツと呪文を説いた
すると、クラウンの左手にある水晶が光ってクラウンを
つつみ込み、クラウンは消えた。

しばらくルルは椅子に座りこんで、考えた

たまに、何度かあの、王家の紋章が書いてある機械の無線に呼び出
され

クラウンはいつも、宮殿に向かう事がある。だが、ルルがあの紋章
について聞くと

クラウンは言うのだ。『気にしなくていい。』と、それと、ルルは
実の父なのにクラウンに

ついて、知らない事がたくさんあった。生まれた場所や、若いころ
の話。母親の事。

何一つ知らなかった。

どうして、実の父親なのに、自分は父の事を何も知らないのだろう
と。

そう、思った瞬間窓の方から、眩しい光が見えた

ドッゴン

ルルはすぐに窓の外を見た。

『あ！あああああ！！街が！！』

なんと、空中艇はラスアまで攻撃をしていたのだった。
ルルは、震えて、座り込んだ。

『ど、どうして・・・なんで?..?』

その時、ルルはふと、頭の中にクラウンの顔が出てきた。

『パパ・・・』

ガチャン

ドアが開いた。

『パパ!!..!』

ルルは、ドアの開いた方を見た。

『ルルさん!!..!』

アルが心配して、ルル達の様子を見に来たのだった。

『アル!!..!どうして?..?』

『外が火の海で・・・心配で来てみたんです。クラウンさんは?..?』

アルがそう聞くとルルは答えた

『分からない・・・宮殿に行った・・・』

『宮殿に???宮殿はマケドア帝国の騎士達がうじゃうじゃいるらしいですよ?..?』

『そ、そんな!!..!どうして???マケドア帝国がラスアを襲わなきゃ

ならないの?』

ボカン

すると、今度は近くで爆発のような音が聞こえた。

『ルルさん!!ここは、危険です。すぐに場所を移動しましょう!』

アルが外の様子をつかがいながら言った。

『う、うん』

ルルはそう言うときアルは玄関へ向かった。

『アル!!ちょっとまって!!』

すると、ルルは何か嫌な予感がしたのか自分の部屋に戻った。すると、ルルは自分の部屋の壁に飾られている、刀を手にした。その刀には”朱雀”《すざく》と記されていた。そして、ルルはその刀を見ながら、クラウンが言った言葉を思い出した。

『ルル、何かあった時は、この朱雀を持って行きな。』

『パパ、パパはどうして、ふつうの”けん”をつかわないの??どうして、”かたな”じゃなきゃいけないの??』

幼いルルが、若いクラウンに聞いた。

『昔、和国とゆう国があつて、刀は魔を斬る力があるとしていたんだ。朱雀は和国の天の王の力が眠っているんだよ』

ルルは、ゆっくり目を開け、朱雀を握り締めた。

『ルルさん！！早く！！』

ルルは急いで、アルがいる方へ向かった。

外に出ると、ラスアの空は赤い緋色をしていた。

幸運にも、ルル達が住んでいる地域には、攻撃をされていなかった。

『いつもだったら、空中艇があるはずなのに・・・』

『きっと、マケドア軍がラスアの空を占領したのでしょう・・・』

アルは空を見上げながら眼鏡のふちを持った。

すると、後方から凄まじい風が、ルル達を襲った。

『うわあ~~~~~』

アルは顔を手で覆った。ルルは身に覚えがある風だったのでもしや、
と思い

風が吹いてくる方を見た。すると、小屋の上から、空中バイクが飛んできた。

すると、その空中バイク次に、大きめな空中バイクが後をついてき

たのだった。

ルルは、その始めにきた、空中バイクを目を凝らすように見た。すると、そこに乗っていたのは、昼みかけた、あの青年だった。

『あの人……』

ルルはポツリと言った。

『え??.』

アルは目を開けた。
すると、ルルは、空中バイクを追った。

『ルルさん!!どこに行くんですか!!..』

つかさず、アルはルルの後を追った。

『あの人、きっと、マケドア軍に追われているんだわ!!..』

『なんなんですか??知ってる人なんですか??..』

アルはルルの後を追いながら聞いた。

『知らない。だけど、助けなきゃ』

『どうやってですか??相手は空ですよ??..』

すると、大きめな空中バイクは青年にミサイル発砲した。

バン

『あ!!!!!!』

ルルは叫んだ

青年はミサイルを避けようとしたが、ギリギリのところであつた青年が乗ったバイクは、起動が不安定になり、だんだんと高度が下がっていった

青年は、あせつてバイクに魔法でエネルギーを送るが、バイクは不安定のままだった。

軍の空中バイクは、止めを刺すめ、また発砲の準備をした。

『止めを刺す気だ!!』

アルは走りながら、様子を見ていた。

『なんですって!!』

ルルはアルの言葉を聞き慌てた。

軍の空中バイクが発砲しようとしたその直前。青年はバイクから、手を離し右手で左手を抑えながら、なにか呪文を唱えてるようにルルには見えた。

『もう駄目だ。』

アルは残念そうに言った。

青年は、その格好のまま上体を、軍のバイクの方に向けた。すると、

左手から、小さい黒い円の様な物

が青年の左手から、発射され、軍がミサイルを発射した。すると、その黒い円がミサイルとぶつかった様に見えたが、黒い円はそのまま軍のバイクの方に進み、ミサイルは消え、そのまま軍バイクへぶつかった

どっかかかかかかん

先ほどの爆発よりも、激しく、そして明るい光だった。

ルルとアルはしばし、その場で凍りついた。

ルルは、青年の方を見た。すると、青年はさきほどと変わらない格好で、右手で左手を抑えながら、左手を見ていた。すると、苦しそうに手を抑えていた。

『何が起こったの??』

ルルは、軍の空中バイクを見たが、その姿は見えなかった

『ルルさん!!何か様子がおかしいです!!あの人!!』

アルは青年の方を指で指しながら言った。

すると、青年はさきほどよりも、苦しそうに手を抑え、もがいていた。

空中バイクは、風の力を失い。落下していった。

『あ、落ちてく!!』

アルがそう言うのと、空中バイクは宮殿の方へ落ちていった。

『宮殿の方だわ！！行ってみましょ！！』

そう言つて、ルルは宮殿に向かって走つていった。

『ルルさん！！そっちは危険ですよ！！』

アルは、ルルをそう言つて追いかけた。

街の方は、あちこちで火災がおこっていて、いつも活気づいていた街と違って、全体が緋色で焼けた臭いが漂っていた。
ここに住む人々はどうかへ、逃げていったようで誰もいなかった。

『ひどい・・・ラスアの街が・・・』

アルは辺りを見渡して悲しげに言った。

ルルも、あちこちを見渡した。

宮殿の近くまで、くると、壊れた空中バイクが乗り捨ててあった。

『これ・・・』

ルルが、空中バイクに近づいていった

『待て！！』

突然、後ろから声が聞こえ、アルとルルは振り返った。

すると、四方八方から、マケドアの軍の騎士がルル達の方へ来た。

ルル達は、マケドア軍に囲まれてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8932d/>

名もなき世界の物語

2011年1月30日02時47分発行